

## 北来太子案を通して見た福王弘光帝について (2)

滝野 邦雄

### ②高名衡による洛陽の調査報告

『明清史料』壬編（第五本・四一三頁～四一四頁）に高名衡<sup>1)</sup>の「細察失領（雒）根因并城内情形據實奏聞仰乞聖鑒」題本が掲載されている。日付が記されていないのでよく分からないが、高名衡が崇禎十四年一月下旬に陥落した洛陽の調査に派遣された時の報告であろう<sup>2)</sup>。

臣（高名衡）切（竊）かに〔以下のように思います〕。雒陽 失陷（占領される）の後、賊の勢い猖獗し、百里の内 更に行人無し。此の時、即ち一つの消息を探らんと欲するも、

- 1) 高名衡、字は平仲、号は鷺磯。山東沂水の人。崇禎四年辛未科（一六三一）三甲二百四十名の進士。江蘇如皋縣知縣から江蘇興化縣知縣となり、雲南道御史となつて、河南巡按となる。そして、開封を李自成から守りぬいたことから、河南巡撫に任命される（崇禎十四年三月甲午（十九日）～崇禎十五年十一月辛未（五日）在任）。開封が再び攻撃され落城し、罷免されて、故郷の山東沂水に帰る。清朝の軍が山東沂水を攻め落とした時に、殉難する。

徐秉義（字は彦和、号は果亭。江蘇崑山の人。明・崇禎六年（一六三三）～清・康熙五十年（一七一））。康熙十二年癸丑科（一六七三）一甲三名の進士）の『明末忠烈紀實』に、つぎのようにいう。

高名衡、字は平仲、〔山東〕沂水の人。崇禎辛未の進士なり。〔江蘇〕如皋縣に知たり。〔江蘇〕興化〔縣知縣〕に調せられ、考選して雲南道御史と爲りて河南に巡按たり。〔崇禎〕十四年、李自成 洛陽を破り、汝・鄭を下し、勝ちに乗じて開封に趨く。〔崇禎十四年〕二月十八日、力を并せて疾く攻む。時に巡撫の李仙鳳 世子（福王世子由崧）を河北に慰安す。〔高〕名衡と開封の推官の黃澍・祥符知縣の王燮 共に設守（防禦の配置をする）す。周王（周王恭枬） 帑金五萬兩を出して士を犒う。賊 〔開封城〕西北の隅を攻めること最も急なり。〔王〕燮 部分（手配する）して扞御（防ぎ守る）し、矢石を避けず。賊 城に穴して將に入らんとす。守る者は投ずるに火を以てし、輒ち之を斃す。他の殺傷する所甚だ衆し。戸を積めば〔開封の〕城〔壁〕と平（相い等しい）しきなり。七晝夜もて下す能わず。始めて〔包圍を〕解きて去る。帝（崇禎帝） 其の能を嘉し、〔高〕名衡に命じて兗都御史と爲し河南に巡撫たらしむ。是の年の十二月二十四日、〔李〕自成 羅汝才の衆を引きて再び開封を圍む。〔高〕名衡 巡按御史の任濬・總兵の陳永福と偕に城守（開封城の守備）を爲す。周王（周王恭枬） 盡く庫金を出して師を犒い、傷を被る者と賊を殺すと同じく賞す。賊 衝車（攻城用の兵車）もて擅に〔攻〕撃し、負戸（戸板を背負って弓矢を避ける）して穴を穿つ。〔その結果〕、城 壞れ、二十七の坂（斜面）たり。皆な距躍（跳躍）して上る可し。垣かなる大遠（大きな四通八達の道路）の如し。〔陳〕永福 吏士を率いて力闘す。賊 火發機（火箭矢）を飛せば、〔陳永福の〕洞胸達脇（胸に穴をあけ脇に達した）す。〔陳永福の〕愛弟・親將 背後に殞（亡くなる）するも、終に動くを爲さず。〔陳永福の〕矢 〔李〕自成を射て目に中る、手づから巨砲を發して其の巨魁の上天龍等を殺す。擐甲（甲冑を着たまふ）すること四十晝夜、須眉（ひげや眉毛） 焦灼（焼け焦げる）し、指血 滲漉（したたる）たり。生賊三十三人、一千七百十有八級を斬る、城 乃ち克く全うす。賊 〔崇禎〕十五年正月十四日を以て退きて朱仙鎮に屯す。〔崇禎十五年〕三月、賊 復た進みて以て城を攻む。士卒 多く傷つき、遂に長圍を起こし、以て必ず抜かんことを期す。帝（崇禎帝） 侯恂に命じて援剿官の兵を率いて開封を救わしむ。左良玉 近境に壁（駐守）するも、賊を憚れて敢て撃せず。圍むこと既に久しく、城中の食 盡く。周府の官人も亦た飢色有り。〔高〕名衡等 守（開封の防禦）の且に支えざらんとす。城北十里に枕黄河あり。黃澍 乃ち河水を引き濠に環らし以て自ら固くし、且に用いて以て賊に灌ぐ可しとす。〔崇禎十五年〕九

しか  
而れども能わざるなり。四日の後、始めて鄰縣の僂師塘(洛陽の東)の報に接す。[これは]、空谷足音(得難い音信)に異ならず。故に一聞し即ち據り以て入告(事をもって上聞する)す。[その報告は]、計り及ぶに暇あらず。報の虚實・詳略は、敢て絲毫も其の間に隠飾(飾)すること有るに非ざるなり。賊の雒(洛陽)を去るに及び、始めて的役(徴発した役所の下働き)を遣りて秘かに察(調査)し、更に奉けたる世子の手書もて蓋し已に「洛陽の状況」を十に其の八を得。今、欽命されし二臣<sup>②</sup>の後に従い、親身(自分自身から)に雒(洛陽)に詣る。福王(常洵)の禮もて殮(かりもがり)するの餘に于いて、即ち雒城失陷の始末、前後 情形の倅<sup>ひと</sup>しからざるを將<sup>も</sup>つて、新たに河南府知府に任ずるを委ねらる郭載騷(河北深州人。舉人)に責(督促)し、備細(詳盡)に察詳す。敢えて附和偏聽せず。[この報告が]直(眞)を失い再び察訪(調査訪問)するの輿論を致すを恐る(『明清史料』壬編・第五本・「細察失領(雒)根因并城内情形據實奏聞仰乞聖鑒」題本・四一三頁)。

①泰昌帝光宗の名前が「常洛」のため、「雒」を「洛」の代字として用いる。以下同じ。

②『國權』によれば、「[上(崇禎帝)又た曰く] [駙馬都尉の冉] 興讓及び總督京營司禮太監の王裕民に命じて福世子(由崧)を慰め、宮眷及び殉難の官民を察するを命ず」(『國權』卷九十七・「崇禎十四年二月己巳(二十四日)」条・五八八九頁)とある。また、『三朝野記』では、この二人に「禮科の葉高標」が書き加えられている。詳しくは本稿(1)の143頁～146頁参照。

③『豫變紀略』卷四に「二月丁未(二日)、賊 洛陽を棄てて去る」とある。

洛陽が占領されてから、賊の勢いは非常に盛んとなり、百里四方には道行く人はおりません。この時、情報を探ろうといたしましたが、できませんでした。四日後になって、はじめて洛陽

月十五日、河 決す。賊 高阜に營(駐屯)するも、亦た其の卒萬人を沈む。河 流れて城に<sup>つきあた</sup>衝る。勢い山岳の如し。北門より入り、東・南の門を穿ちて出ず。[城中に] 流入して渦水たり。水 驟<sup>は</sup>せて長さ二丈となり、土民の溺死するもの數十萬なり。[高] 名衡以下、咸な小舟に乗り城頭に至る。周王府第 已に淪溺し、後山より西城樓に逸り出ず。諸王及び宮眷 雨中に露栖すること七日。督師の侯恂舟を以て王を迎う。[高] 名衡 夜に乗じて北渡す。城中の遺民は數萬なり。賊 舟を浮かべて入城し、盡掠(掠奪し尽くす)し以て去る。河北の諸軍 大炮を以て撃ち、子女五千餘人を奪回す。城堞(城壁)・宮殿 信宿(数日)にして俱に泥中に陷む。[崇禎十五年] 十一月、[高] 名衡 免ぜられ歸る。明年、大兵(清朝の軍) 沂州を攻む。夫婦 皆な抗冒(抵抗して敵をのしる)して屈せず、之に死す(『明末忠烈紀實』卷七・殉齊魯傳・「高名衡」条：浙江古籍出版社・一九八七年刊・九十三頁～九十四頁)。

- 2) 襄陽が崇禎十四年に張獻忠によって落城し、襄王翊銘が殺害された時も、同様の調査報告がなされている。襄王翊銘は、仁宗洪熙帝の第五子の瞻埜を始祖とする藩王である。

この「恭陳襄陽被陷、失事種々情形、詳悉奏聞、仰祈聖鑒」科抄(中国第一歴史檔案館編『清代檔案史料叢編』第六輯・明代檔案史料・「36 欽差總提京營戎政秉筆太監王裕民等陳襄城失陷詳情科抄」・八十八頁～九十二頁：中華書局1980年)は、

落城の経緯

殉難した人たちについて

冊寶・印の行方についてと城内の建物の現状

総括と対策

という順序で報告が行なわれ、高名衡の報告と同じ形式になっている。

の東の偃師塘からの報告に接しました。これは、得難い情報に他なりません。そこでこの報告を聞きすぐに上聞いたしました。この報告については、内容の吟味する時間はありませんでした。そのため、報告の虚実・詳略は、あえてわずかでも隠したり付け加えたりしたものはございません。さて、二月二日に賊が洛陽を立ち去ってから、はじめて徴発した役所の下働きを派遣して、ひそかに調査いたしました。さらに、福王世子の手ずからの書簡などからすでに〔洛陽の状況を〕八割ほどを理解いたしました。いま、勅命を受けた駙馬都尉の冉興讓と總督京營司禮太監の王裕民に付き従って、みずから洛陽に参りました。福王常洵のかりもがりの間に、洛陽の陥落の顛末や前後の事情の異なっていることを、新たに河南府知府に任名された郭載駉を督促して詳しく調査させました。附和したり一方の発言に同調したり、そのみを聞くようなことはしておりません。ただ、この報告が真実でなく再調査をせよという多くの議論がでてくることを心配するのみです、と高名衡はいう。

高名衡は、洛陽が陥落してから、偃師塘からの報告を得てすぐに報告する。その後、賊が洛陽を立ち去ってから改めて調査を行ない、できるだけ私情を交えず正確にこの報告を行なうというのである。

まず、なぜ容易に洛陽が占領されてしまったのかについて報告する。

將官の羅泰の兵 潰え<sup>①</sup>、而して總兵の王紹禹の領する所の兵、名（名目）は三千と雖も、實は千に満たず、冒破（横領）剋減（上前をはねる）ありて、衆兵 之を恨むこと已に久し。賊の攻城の逼近するに及び、〔王〕紹禹 擁する所の重賞 賊の手に落ちることを懼れ、堅く進城を求む。進城するに及び、福王（常洵）犒賞銀四千兩を發す。〔王〕紹禹 又た私囊に婪入す。衆兵 恨みを銜（銜）むすること愈々深し。適たま王都司（都司：都指揮使司）〔の兵士〕 賊に従い、遂に兩叛 相い合す。〔王〕紹禹の兵丁（下士官や兵卒） 塚（塚）夫（城壁を守っている兵卒）を亂斫し、賊を呼びて西城より上らしむ。又た火を發して内應し、西門を打ち開く。城中 大いに亂る。此れ正月二十日二更の時なり。〔洛陽城の守備隊は〕、信（軍隊を配置する場所）を分かちて防禦す。西城を守るは、則ち守道（分守道）の王胤長、衛官の李宜棟、推官の衛靖中（乾隆十年重修『洛陽縣志』卷之九・職官・二十八葉に「〔陝西〕韓城人、舉人」）、承奉正の劉顯、郷官の呂維祺等なり。南城を守るは、則ち知府の憑俊（乾隆十年重修『洛陽縣志』卷之九・職官には、「憑一俊」に作る：卷之九・職官に「〔山西〕蒲州人。舉人」）、典寶副の崔昇、郷官の王明等なり。東城を守るは、則ち通判の白尙文（卷之九）、典膳副の劉進忠、舉人の郭永祚（乾隆十年重修『洛陽縣志』卷之七・選舉・二十六葉「同上（崇禎癸酉（崇禎六年）の舉人）、易門知縣」）等なり。北城を守るは、則ち雒陽知縣の張正學（崇禎十三年庚辰科（一六四〇）三甲四十九名の進士。十五年任：乾隆十年重修『洛陽縣志』卷之九・職官・三十六葉に「〔陝西〕同州人、進士」）、典寶正の蕭昇、訓導の張道脈、郷官の邢紹德（萬曆四十七年己未科（一六一九）三甲四名の進士：乾隆十年重修『洛陽縣志』卷之七・選舉・十一葉に「〔萬曆四十七年〕己未〔科

の進士]。監察御史)等なり。此れ鎮兵(總兵の兵士)の譟叛(騒ぎ立てて叛乱を起こす)し賊を勾<sup>ひきよ</sup>せ、陷城(城壁を壊)して失守(陥落)するの確情なり(『明清史料』壬編・第五本・「細察失領(雒)根因并城内情形據實奏聞仰乞聖鑒」題本・四一三頁)。

①戴笠の『懷陵流寇始終』には、「河南の總兵の王紹禹 闖賊と宜陽永城に戦い敗る。甲午(十八日)、副將の羅泰・劉有義を率いて河南府に至り、入城を請う。福王 之を止むるも、[總兵の王紹禹は]聽かず、兵 盡く入る。[羅]泰と[劉]有義 夜に七里河に走り賊に投ず」(南京圖書館藏清初錢氏述古堂鈔本『懷陵流寇始終錄』卷十四・「崇禎十四年春正月」条・一葉:『續修四庫全書』史部・雜史類・第441冊所収)とある。

將官(副將)の羅泰の部隊が潰えてしまい、總兵の王紹禹が率いていた兵士は、名目上では三千人としていましたが、実際は千人もおりませんでした。總兵の王紹禹は、横領や兵士の上前をはねたりしたため、兵士たちは長らく恨みに思っていました。賊の洛陽城攻撃が間近になって、王紹禹は自分の持っているたくさんの金銭が、賊の手に落ちることを心配し、強く洛陽城内に入ることを要求しました。入城すると、福王(常洵)はねぎらい金四千兩を出されました。王紹禹は、またそれをむさぼり自分のふところに入れました。兵士たちは、ますます深く怨みました。たまたま、王都司(都司:都指揮使司の王紹禹)の兵士が賊に寝返ってしまい、とうとうふたつの反乱がひとつになってしまいました。王紹禹の下士官や兵卒は、城壁を守っている兵卒をむちゃくちゃに斬り、賊に呼びかけて、西城から登らせ、さらに火をつけて内応し、西門を開いたため、城内は大混乱となりました。これが正月二十日二更(夜九時から十一時)の時です。洛陽城の守備隊は、駐屯の部署を分けて防禦しておりました。西城を守っていたのは、守道の王胤長、衛官の李宜棟、推官の衛靖中、承奉正の劉顯、郷官の呂維祺等です。南城を守っていたのは、知府の憑俊(憑一俊)、典寶副の崔昇、郷官の王明等です。東城を守っていたのは、通判の白尙文、典膳副の劉進忠、舉人の郭永祚等です。北城を守っていたのは、雒陽知縣の張正學、典寶正の蕭昇、訓導の張道脈、郷官の邢紹徳等でした。これが總兵の兵士が騒ぎ立てて叛乱を起こし、賊を勾<sup>ひきよ</sup>せ、城壁を壊して洛陽城が陥落してしまった確実な実情です、と高名衡はいう。

洛陽が陥落したのは、王紹禹があまりにも強欲で兵士たちから恨まれており、この洛陽の攻防戦にあたって、その兵士たちが李自成に寝返ったからだという。

続いて、福王世子の由崧とその父親の福王常洵について報告する。

時に于いて福王世子(由崧) 縋城(城壁からたらしした縄によって降りる)して東行す。賊 遂に擁(つめかけ)至る。世子(由崧) 驚散(びっくりして逃げだす)し、河を渡る。孟縣知縣の張兆熊<sup>3)</sup> 聞知(知道)し訪尋し迎えて城内に入れしむ。福王(常洵) 賊に執<sup>とら</sup>えられ、西關に至る。福王(常洵) 抗節(固く節操を守る)して屈せず。地不(上)に跌(踏)坐す。賊 屢しば福王を逼勒(脅迫)す、[しかし福王は]目を閉じて首を揺かして語<sup>つ</sup>げず。既にして大いに罵る。乃ち遂に遇害(殺害される)さる<sup>4)</sup>。此れ正月

二十一日の事なり。時に典寶(印璽を管理する役人)の崔昇及び寫字の強文忠等 遮護(さえぎる)して代わらんことを願う。賊 亦た義として之を釋し、其の棺を覓めて暫く埋めることを聽す。乃ち〔福〕王(常洵)の寶・冊は並びに失われ存する無し(『明清史料』壬編・第五本・「細察失領(雒)根因并城内情形據實奏聞仰乞聖鑒」題本・四一三頁)。

この時、福王世子の由崧は、城壁からたらしした縄によって降りて東に逃げました。賊が詰めかけてきたので、福王世子由崧は、びっくりして逃げだし、黄河を渡りました。孟縣知縣の張兆熊は、それを知り、探し出して城内に迎え入れました。福王(常洵)は賊に捕らえられ、西關に連行されました。福王(常洵)は、固く節操を守って屈せず、地に足を組んですわっておられました。賊は、何度も福王(常洵)を脅したのですが、福王(常洵)は目を閉じて頭を横に振って何も話そうとなさいませんでした。しばらくして、大いに賊を罵られました。そこでとうとう殺害されました。これは、正月二十一日の事です。この時、典寶(印璽を管理する役人)の崔昇や寫字の強文忠などが、遮りかばって身代わりになることを願い出ました。賊は、それを勇気ある行動だとして崔昇などを見逃してやり、福王(常洵)の棺を求めて暫定的に埋葬することを許しました。しかし、福王(常洵)の寶・冊は、失われてしまい残っておりません、と高名衡はいう。

福王世子由崧は、逃げて黄河を渡り、孟縣知縣の張兆熊に保護される。しかし、福王常洵は捕まえられ、賊を罵って殺害された、というのである。ここでは、いわゆる「福祿酒」についての言及はない。王族の名誉にかかわることなので、あえて触れなかったのか、よく分からない。もともと噂にすぎなかったのかもしれない、

そして、福王一家について報告する。

其れ世子(由崧)の繼妃李氏、福王(常洵)の選侍の孟氏・蕭氏・李氏等、乳保(乳母)の劉氏及び内執事の二十餘人 俱に二十日夜に于いて、投縊(自縊)す。[そして] 焚屍

- ✓ 3) 民國『孟縣志』によると、張兆熊は、保舉(巡撫の推挙)によって孟縣知縣に任ぜられた。陝西洋縣の人。保舉に由りて崇禎十三年 保(任)ぜらる(民國『孟縣志』卷五・職官・四十一葉・「張兆熊」条)。

また、康熙『洋縣志』によれば舉人から、溫縣知縣となり、孟縣知縣に転任したという。

張兆熊 崇禎九年(一六三六年)、孝廉(舉人)に擧げらる。[そして] 溫縣知縣を授けられ、孟縣に調せられる・・・(康熙『洋縣志』卷之四・舉貢・「張兆熊」条・二十三葉)。

①「禎」字を忌避して一字空格となっている。

- ✓ 4) 襄王翊銘が殺害された時の状況も、調査報告によると、  
襄王〔翊銘〕 西城の樓上に執えらる。屢々脅さるるも屈せず。已にして賊を罵る。賊 怒り手刃もて三たび刀(屠殺)し、襄王〔翊銘〕 遂に遇害(殺害)さる。餘の〔すでに亡くなっていた〕世子の靈柩の如きも焚かれ、貴陽王〔常法〕の冲年(若い子供)も害せらる。傷ましきかな。惨なること一に此に至る(「恭陳襄陽被陷、失事種々情形、詳悉奏聞、仰祈聖鑒」科抄(中国第一歴史檔案館編『清代檔案史料叢編』第六輯・明代檔案史料・「36 欽差總提京營戎政秉筆太監王裕民等陳襄城失陷詳情科抄」・八十九頁：中華書局1980年))。

とあり、賊の脅しにも屈せず、賊を罵って殺害されたと報告されている。



を被り、皆な辨（弁別）し難し。惟だ福王（常洵）妃の鄒氏 屢しば身を以て殉ずるも、竟に死するを獲ず。顛沛（苦勞して）に間關（輾轉）として河北に扶傷（傷ついた人を扶助する）さる、而して世子（由崧）の冊・寶 亦た幸いに見在（生存）し保護さる。然れども世子（由崧） 亦た尙お子女無く、流離し孤苦（孤獨で困苦）す。惟だ母子の相い依る有るのみ。誠に悲しむ可し（『明清史料』壬編・第五本・「細察失領（雒）根因并城内情形據實奏聞仰乞聖鑒」題本・四一三頁）。

福王世子由崧の繼妃の李氏、福王（常洵）の選侍の孟氏・蕭氏・李氏などや、乳保（乳母）の劉氏および内執事の二十餘人は、二十日の夜に投縊（自縊）しました。そして燃やされてしまったので、すべて弁別できません。ただ福王（常洵）妃の鄒氏は、何度も殉じようとしたもののうまくゆかず、苦勞して転々として、河北にたどりつき保護されました。福王世子由崧の冊・寶はまた幸いにも残っていて保存されております。しかし福王世子の由崧は、子女がおらず、離散して落ち着くところがなく孤独で苦しんでおられます。いまはただ母と子とが寄せ合っているだけの状態です。ほんとうに悲しむべきことです、と高名衡はいう。

福王世子由崧の繼妃の李氏や福王常洵の妃などが自縊したが、福王常洵の妃の鄒氏はなんとか河北にたどり着いたという。ただ、父王の喪に服さなければならない時期の世子（由崧）を「亦た尙お子女無く、流離し孤苦（孤獨で困苦）す。惟だ母子の相い依る有るのみ。誠に悲しむ可し」と報告しているのは、高名衡が得た「世子（由崧）の手書」にこうした内容が記されていたためであろうか。本稿（1）の144頁～145頁で検討した『國權』（卷九十七・「崇禎十四年二月己巳（二十四日）」条・五八八九頁）の「渝禮」と何らかの関わりがあるのかもしれない。

続けて、洛陽の官員について報告する。

而して内執事の脱離して見在（生存）するは、則ち武吉花等三十名有り。其れ内外の文武の〔官の〕殉難するは、則ち承奉正の劉顯、典膳正の錢福、門正の李朝雲并せて司庫の張一科等及び執事等の官の張進喜等 共に三十六員、書堂官の焦如星、良醫正の張鳴皋・杜一經、典樂の劉文魁、正千戸の龔孟春、副千戸の楊國樑、典仗の楊汝忠、百戸の陳福・趙永壽、鎮撫の丁有年・張進忠 共に十一員なり。奉差して被難して見在（生存）するは、則ち承奉副の高朝、典寶正の蕭昇、典寶副の崔昇、門副の許文昇、典膳副の劉進忠、典服正の尙成 共に六員、伴讀・司房・寫字・隨侍・司庫・執事等の官の屈尙忠等一百二十九員名、書堂官の常應俊等の九員右（名）、長史の凌嗣茂等及び引禮生の馬榮等十八員名、千百戸典仗官の沈元守等の十七員、王親（君王の親屬）の千戸等官の鄒存義等の五員、下落（落ち延びる）する無く虜にさるに及ぶと察するは、則ち執事等の官の高國太等 八員、審理正の李春茂等の六員名、千百戸の劉廷楫等の五員なり。此れ藩封の罹變して抗節（固く節を守る）・死忠・被難・流離（離散）するものの確情なり（『明清史料』壬編・第五本・「細察失領（雒）根因并城内情形據實奏聞仰乞聖鑒」題本・四一三頁～四一四頁）。

そして内執事で逃げ出して現存するのは、武吉花など三十名がいます。内外の文武の官で犠牲となったのは、承奉正の劉顯、典膳正の錢福、門正の李朝雲、司庫の張一科などや執事の張進喜などの三十六人と、書堂官の焦如星、良醫正の張鳴皋・杜一經、典樂の劉文魁、正千戸の龔孟春、副千戸の楊國樑、典仗の楊汝忠、百戸の陳福・趙永壽、鎮撫の丁有年・張進忠の十一名です。出張でやってきて洛陽陥落に巻き込まれながら現存しているのは、承奉副の高朝、典寶正の蕭昇、典寶副の崔昇、門副の許文昇、典膳副の劉進忠、典服正の尙成の六人、伴讀・司房・寫字・隨侍・司庫・執事などの官の屈尙忠等百二十九名、書堂官の常應俊等九名、長史の凌嗣茂等や引禮生の馬榮などの十八名、千百戸典仗官の沈元守などの十七名、王親（君王の親屬）の千戸などの官の鄒存義等五名です。行方不明で捕虜になったと思われるのは、執事等の官の高國太など八名、審理正の李春茂などの六名、千百戸の劉廷楫など五名です。これが王府の陥落した時の抗節（固く節を守る）・死忠（忠を尽くす）・被難（罹災）・流離（離散）した人たちの確実な実情です、と高名衡はいう。

まず、無事に逃げて生存したり、犠牲となったりした官員の名前を挙げる。

そして、続いて殉難した人たちについて報告する。

其れ殉難する有司は、則ち通判の白尙文なり。然れども亂屍を察するに認め難し、[その理由として] 又た餓民の剗食を爲せばなりと傳う<sup>①</sup>。訓導の張道脈 賊の城上に砍死するを被り、典史の孫允翰、河南衛の署印もて候缺する經歷の任茂奇 俱に賊の砍死するを被る。經歷の印 失わる。掌印指揮使の李宜棟、千戸の姚允中は井に投じて死す。百戸の龔元勳・許調昇、官舎の司法孔 皆な賊の砍死するを被る。以上は皆な正月二十日なり。惟だ守道（分守道）の王胤長 傷を帶びし後に死す<sup>②</sup>。郷紳[で亡くなったの]は、則ち尙書の呂維祺、知縣の劉芳奕（乾隆十年重修『洛陽縣志』卷之七・選舉・二十六葉に「同上（天啓甲子（天啓四年（一六二四）の舉人、[山東]昌樂知縣）」・韓金聲（河南洛陽の人。崇禎三年（一六三〇）の舉人。崇禎四年辛未科（一六三一）三甲一百三十四名の進士。[河北]邯鄲知縣：乾隆十年重修『洛陽縣志』卷之七・選舉・十二葉（進士）と二十六葉（舉人）による）、行人の王明（河南洛陽の人。崇禎九年（一六三六）の舉人。崇禎十年丁丑科（一六三七）三甲一百一十一名の進士：乾隆十年重修『洛陽縣志』卷之七・選舉・十二葉に「同上（丁丑の進士）、行人」）、同知の楊萃（乾隆十年重修『洛陽縣志』卷之七・選舉・二十五葉に「癸卯（萬曆癸卯（萬曆三十一年（一六〇三）の舉人）。[湖南]辰州知府」）、推官の常克念、舉人の苟長・韓孔目・郭顯星（乾隆十年重修『洛陽縣志』卷之七・選舉・二十六葉に「同上（萬曆四十六年（一六一八）の舉人）。翰林院待詔」）、千戸の周王魁なり。婦女[で亡くなったの]は、則ち王親（君王の親屬）の鄒存義の母寇氏、妻孫氏、女の堯姐、舉人の郭永祚の妻左氏、並びに兒婦楊氏、錦衣衛千戸の魏朴の妻秦氏、并せて兒婦生員陳國政の母の黃氏、溫熙の母于氏、百發奇の妻の李氏なり。其餘の百姓の家は、則ち未だ枚舉に易からず。其れ下落（落ち延びる）する無きを察するは、則ち縣丞の王敬一、訓導の周命新、駟

亟（丞）の何鳳喬，指揮の王國寧なり。署の伍印と千戸の丁自美は，印を并せて存する無し。百戸の孫世英は，印を失いて，又た署印を失う。被難（罹災）して見在（生存）する有司は，則ち知府の憑一俊（乾隆十年重修『洛陽縣志』卷之九・職官・二十八三葉・「〔山西〕蒲州人，舉人」），推官の衛靖中（乾隆十年重修『洛陽縣志』卷之九・職官・二十八八葉に「〔陝西〕韓城人，舉人」），知縣の張正學，經歷の夏奎，知事の隨景明，炤磨の田慶年，大使の吳其一・趙琨，百戸の陳皇圖・內皇圖の印は焚毀さる，教授の錢應福，訓導の岳鍾・聶雲程，教諭の王俊傑（乾隆十年重修『洛陽縣志』卷之九・職官・四十四葉に「〔陝西〕洧川人。歲貢」），訓導の崔鉉，經歷の劉緯なり（『明清史料』壬編・第五本・「細察失頌（雒）根因并城內情形據實奏聞仰乞聖鑒」題本・四一四頁）。

①谷應泰編の『明史紀事本末』（卷七十八・「崇禎十四年春正月」条）に「河南 方に大いに饑ゆ。通判の白尙文城より墜ちて死す。其の屍は，飢民の食べる所と爲る・・・」という。乾隆十年重修『洛陽縣志』卷之九・官蹟・「白尙文」条・三十八葉には「白尙文，貢士なり。崇禎十四年，河南通判に任ぜらる。闖寇洛〔陽城〕を陥し，城より落ちて死す」とあり，「城より墜ちて死す」という。

②乾隆十年重修『洛陽縣志』では「城より墜ちて死す」とある。注5参照。

殉難した役人は，通判の白尙文です。しかし遺体を調べたものの断定しがたいものでした。その理由として，餓えた人々が剗食を行なったためだと伝えられています。訓導の張道脈は，賊によって城上で斬り殺され，典史の孫允翰と河南衛の署印を持って候缺（欠員待ち）の經歷の任茂奇とは，賊によって斬り殺されました。そして經歷の印章は失われました。掌印指揮使の李宜棟と千戸の姚允中とは，井戸に身投げをして亡くなりました。百戸の俞元勳・許調昇，官舎の司法孔は，賊によって斬り殺されました。以上はすべて正月二十日のことです。惟だ守道（分守道）の王胤長<sup>5)</sup>は，負傷した後に亡くなりました。郷紳では，尙書の呂維祺<sup>6)</sup>，知縣の劉芳奕・韓金聲，行人の王明，同知の楊萃，推官の常克念，舉人の苟長・韓孔目・郭顯星，千戸の周王魁が亡くなりました。婦女は，王親の鄒存義の母寇氏・妻孫氏・女の堯姐，舉人の郭永祚の妻左氏と兒婦の楊氏，錦衣衛千戸の魏朴の妻秦氏と兒婦で生員陳國政の母の黃氏，溫熙の母于氏，百發奇の妻の李氏です。其餘の人々の家のことは，取り上げきれないほどです。行方不明と思われるのは，縣丞の王敬一，訓導の周命新，駟亟（丞）の何鳳喬，指揮の王國寧です。署の伍印と千戸の丁自美は，印とともに行方不明です。百戸の孫世英は，印を無くし，また役所の印も失ってしまいました。罹災して生存する役人は，知府の憑一俊，推官の衛靖中，知縣の張正學，經歷の夏奎，知事の隨景明，炤磨の田慶年，大使の吳其一・趙琨で，百戸の陳皇圖・內皇圖の印は燃やされ毀たれてしまいました。さらに教授の錢應福，訓導の岳鍾・聶雲

5) 康熙『吳橋縣志』によると，王胤長は，直隸吳橋の人で，山西武鄉縣知縣より翼城知縣，遼州知州，澤州知州，河鹽運司同知，河南府知府となり河南分守道副使となる。

山西武鄉縣知縣より〔山西〕翼城〔知縣〕に調せられ，〔山西〕遼州〔知州〕に陞り，〔山西〕澤州〔知



州]に調せられ、河鹽運司同知に陞る。[そして]河南府知府に陞り、本省分守道副使に陞る(康熙『吳橋縣志』卷之五・選舉・五葉・「乙卯(萬曆四十三年) 王胤長」条)。

徐秉義の『明末忠烈紀實』に、つぎのようにいう。

王允昌(王胤長) 一に「允長」に作る 字は慶吾、河南吳橋の人。萬曆乙卯(四十三年)の舉人より武鄉知縣(山西武鄉縣知縣)を授けらる。山邑の民 貧しく、生計(生活)を謀らず。允昌(王胤長)紡車(糸繰り車)・布機(織り機)を造り、之に織(布織り)るを教う。給するに牛種(小牛)を以てし、之に耕すを教う。[そのおかげで]民力 稍(次第に)蘇える。[山西]翼城[知縣]に調せらる。猗賊亂(叛乱)あり。之を平らぐ。[山西]遼州、[そして山西]澤州[の知州]に陞り、河南府に知たり。卓異(最高の勤務評価)に擧げられ、本府の分守道(河南分守道副使)に擢せらる。[この時]王府の旗校(將校)[に対して]法を按ずること齊民(平民)に等しくす。城 陷ち、傷を被る。賊 退きて數日にして死す。光祿寺卿を贈らる。[王胤長]の弟の允才(王胤才) 衆を率いて格闘し、亦た之に死す(『明末忠烈紀實』卷一・殉豫傳・「呂維祺附」条:浙江古籍出版社・一九八七年刊・十一頁)。

①乾隆十年重修『洛陽縣志』は清・雍正帝胤禛の「胤」字を避けて「孕」字に作る。

王胤長は、字は慶吾、河南吳橋の人。萬曆四十三年の舉人から山西武鄉縣知縣を授けられた。山西武鄉縣の山間の人々は貧しく、生計を立てるすべを考えていなかった。そこで、王胤長は、糸繰り車や布織り機を造り、布織りを教えた。また、牛種(小牛)を与えて、耕作することを教えた。そのおかげで民力はしだいによみがえっていった。山西翼城縣知縣に配置転換した。その時、猗で叛乱が起こったが、それを平定した。昇進して山西遼州知州・山西澤州知州となり、洛陽知府となった。最高の勤務評価を得て、河南分守道副使に拔擢される。この時、福王府の旗校(將校)に対して齊民(平民)と同じように法律を適用した。洛陽城が陥落し、傷つく。賊が撤退して數日して亡くなる。光祿寺卿を贈られた。王胤長の弟の允才(王胤才)は、人々を率いて戦ったが、戦場で亡くなった、という。

また、乾隆十年重修『洛陽縣志』には、つぎのように述べる。

王孕長(王胤長)、直隸吳橋の人。崇禎の間、[萬曆四十三年の]舉人より河南知府に任ぜられ、守道(分守道:河南分守道副使)に陞る。時に福藩の旗校(將校) 交(みな)横(横暴)たり。[それに対して]孕長(王胤長) 法を執ること山河の如し。氷心(高潔な心)・鐵面(剛直)の頌(たたえ)を屬(帶)有す。闖寇 洛を攻めるに、晝夜 守禦す。會たま兵叛ありて、城 陷つ。[王胤長] 城より墜ちて死す(乾隆十年重修『洛陽縣志』卷之九・宦蹟・「王孕長」条・三十七葉~三十八葉)。

①乾隆十年重修『洛陽縣志』は清・雍正帝胤禛の「胤」字を避けて「孕」字に作る。

王胤長は、河北吳橋の人。萬曆四十三年の舉人で、河南知府となり、河南分守道副使に昇進した。この時、福藩付きの將校たちは、皆な横暴をきわめていた。それに対して王胤長は、山河のようにどっしりと法を適用した。高潔で私情を挟まないと称えられた。闖寇が洛陽城を攻撃すると、昼夜にわたって防禦した。たまたま兵士の反乱にあつて、洛陽城は陥落した。そして、王胤長は、城壁より墜ちて亡くなった、という。

- ✓ 6) 呂維祺、字は介孺、号は明德・預石・明德堂・慎獨堂・明德先生・活潑潑地之軒。河南新安の人。萬曆四十一年癸丑科(一六一三)三甲八十七名の進士。兗州推官となり、吏部考功司主事となり四司を歴任する。驗封郎中に進むが辞任して帰郷する。崇禎帝が即位すると、尚寶司卿に起用され、太常寺少卿そして太常寺正卿となる。崇禎三年、南京戸部侍郎になり、崇禎六年南京兵部尚書となる。後、讒言にされ、辞任する。呂維祺の父の呂孔學が賊を避けて洛陽にいたのにしたがって、洛陽に滞在していた。

李自成によって洛陽が攻略された時の呂維祺の様子を、王鐸(河南孟津の人。天啓二年壬戌科(一六二二)三甲五十八名の進士)は「兵部尚書豫石呂公墓誌銘」で、つぎのようにいう。

……流寇 [洛陽近郊] 宜陽・永寧を破る。公(呂維祺) 家將の李定國を縋(たらしめた縄によって降りる)して[洛陽] 城を出して、寇十餘人を殺す。總兵の王紹禹 寒心(戰栗)し、兵を率いて大城の樓に畏避(怖がって隠れる)す。後、分守道の王胤長・鄉宦の[山東昌樂] 知縣[であった] 劉芳奕 蚤見(先に事態を見極める)する無く、遂に[王] 紹禹をして城を守らし、之を[防禦のなかに] 夾しむ。[王紹禹の兵士の武器は] 皆な鉞戈(つるぎとほこ)の鑕(農具)なれば、[城を守っていた人たちは] 日々駭く。[しかし]、城内の矢石 頗る疆く、以て墮ちる無かる可しとす。公(呂維祺) 北城を守り、方に殫(夕食)せんとするに、其の子の[呂] 環琳・族孫の[呂] 彥侍 曰く、[王] 紹禹

程、教諭の王俊傑、訓導の崔鉉、經歷の劉緯も生き延びております、と高名衡はいう。

殉難した官員のなかに呂維祺を入れているだけで、賊の前で呂維祺が福王常洵に忠告したということは記されていない。

そして、高名衡は洛陽城内の現状を報告する。

雒城の失陥するの時に當りて、[劉] 諱（緯） 登封（河南登封縣）に在り、署印 皆な焚刼（放火掠奪）さる。獄囚は、則ち悉く疎（疏）放（釋放）さる。道・府・縣衙 盡く焚毀さる。紳衿民居は 十に三・四を存す。臣（高名衡）及び監戚の二臣（駙馬都尉の冉興讓と總督京營司禮太監の王裕民）は、偕に雒城に登りて城樓・城堞（城牆上の凹凸狀の小牆）を歴閲するに、率多（多数）は殘毀す。而して城牆は且つ賊の剋（えぐ）る有りて幾んど透く者なり。隨いて監戚の二臣と商議し、且（目）今、[福] 王の靈は殯（かりもがり）に在り、雒（洛陽）は、重地（地理上重要な場所）なれば防守（防備守衛）を倍にし、宜しく嚴なるを加うるべしとす。臣（高名衡） 因りて標下（部下）の遊撃の梁虎の兵馬（部隊）を留めて雒（洛陽）に在りて防守せしむ。其の王府宮室の存する所の者は、王城の四門及び前門内の壇祈（壇坎のことか）・駕庫の東の家廟・輝之隣（未詳）・膳房・木作（木匠の工作處）の花園・西の膳房・米倉・後門の内の花園棚兒なり。其れ承運殿門并せて王妃・世子の各々の工局所は、則ち皆な焚毀す。惟だ瓦礫・灰燼有るのみ。何れの侈（修）繕を作

の兵 城上で寇と隱語す。寇の勢い彌々張り、攻めるに餘力を遺さず。此れ方に肘足（こっそりと示し合せる）の時なり。大人 急ぎ自愛せよ。何ぞ手を拱いて以て殞たんや、と。公（呂維祺） 叱りて曰く、「小子 何ぞ疑畏せんや。雒（洛陽）は大なり。皇上の靈（加護）に頼り、豈に即ち一つの東周の翼（國）を破られんや。萬一 破られれば、我 特立する能わず。平日に聖賢の學を講ず、何をか學ばんや。吾 豈に曲回する所有らんや。[もしも落城するならば] 死有りて生くる無し」と。飲食 自如たり。且つ城士に督し、弩礮の雷發し、之を拒み、[賊を] 傷つくる所多し。少頃、[王] 紹禹の城内の百餘騎長矛（長いほこ）もて鞞鞞（カンカンと響かせる）として路を闌りて馳せて人を殺す。城上 繩もて寇を汲（引）つ張り上げる。す。腹背 敵を受け、寇もて誼る。衆 潰走して曰く、「服を[平服に] 更え、跳げよ」と。公（呂維祺） 曰く、「否」と。曰く、「縋城（城壁からたらしした繩によって降りる）せん」と。公（呂維祺） 曰く、「否」と。曰く、「民舎に避けよ」と。公（呂維祺） 曰く、「否、否」と。天を仰ぎて大いに哭す。寇 至る。枝戟（ほこ） 面（目の前）に在りて、公（呂維祺） を扯きて去く。公（呂維祺） 收哭して愁うる色無し。城西の闔（大門）の周公の廟に至る。大寇の營中の雕几に坐するを見る。公（呂維祺） 跼かず。[大寇] 怒りて曰く、「呂尙書 招撫を總理す。汝 兵を請いて我を勦さんとす。何ぞ太はだ偏人（人を威圧）するや」と。公（呂維祺） 聲を厲しくして曰く、「我 兵部尙書爲り。今、兵馬もて汝が狗彘（極悪卑劣な人間）を殺すこと無きを恨まん。今日、惟だ一死有るのみ」と。時に福王帝と雒（洛陽）の人士と先に前に縛らる。公（呂維祺） 之を顧みて曰く、「綱（綱）に重しと爲す。萬に距く可からず」と。皆な泣き下る。大寇 之をして降[服] せしむ。公（呂維祺） 陽笑して曰く、「世 寧に呂尙書を屈降せしむること有らんや。我 當に國家の事も死すれば、今の死するを顧みざるべし。聖賢を辱めず、天地に羞恥せず。吾 何ぞ汝を畏れんや」と。左右 之を生かさんと欲するも、公（呂維祺） 更（更）に嫚罵して曰く、「生きるの尙書は、一錢に直らず」と。北向して皇帝を拜して哭して曰く、聖恩 未だ報ぜずして、臣の心 竭く」と。西向して父母を拜して哭して從容として頸を伸ばして刃に就きて遂に死す……（『擬山園選集』卷之六十七・墓誌銘四・十八葉～十九葉）。

すかは工部の議奏（意見をまとめて皇帝に上奏する）を聴かん。此れ又た雒（洛陽）城の府第・印信（印章）・庫獄の確情なり（『明清史料』壬編・第五本・「細察失領（雒）根因并城内情形據實奏聞仰乞聖鑒」題本・四一四頁）。

洛陽が陥落した時には、劉諱（緯）は河南登封縣にあり、役所の印は放火掠奪されてしまいました。獄囚はすべて解き放たれ、道・府・縣の役所はすべて焼き尽くされております。人々の住宅は、十に三・四を残すのみであります。臣（高名衡）は、福世子の由崧を慰問する（監戚）ために派遣された二臣（駙馬都尉の冉興讓と總督京營司禮太監の王裕民）と一緒に洛陽の城壁に登り、城壁や城樓を調査しましたところ、ほとんどが破損破壊しておりました。また、城壁は賊によって<sup>えぐ</sup>抉られてほとんど透き通るようになってしまっています。そこで監戚の二臣（駙馬都尉の冉興讓と總督京營司禮太監の王裕民）と相談しましたところ、いま福王は殯（かりもがり）中であり、洛陽は地理上重要な地域ですので、防備を倍にし、厳しい守備を加えるべきだと思います。臣（高名衡）は、そこで部下の遊撃の梁虎の部隊を留めて、雒（洛陽）を守らせております。王府の宮室に残っているものは、王城の四門と前門の内側の壇祈（祭祀の處の意味か）・駕庫・東の家廟・輝之隣（未詳）・膳房・工作所（木工所）の花園・西の膳房・米倉・後門の内の花園の棚です。承運殿門や王妃・世子の各々の工局所は、すべて焼き壊れています。惟だ瓦礫や灰燼があるだけです。どのような修繕を行なうかは、工部の議奏（意見をまとめて皇帝に上奏する）にまかせたいと思います。これが洛陽城内の府第・印章・庫獄の確実な実情です、と高名衡はいう。

また、洛陽城内に残された銀や食料について報告する。

賊の遺す所の銀米に至るに、道路（眾人）の日（口）傳に據るに數十萬有りと。而して原任の雒（洛）陽知縣の張正學（陝西同州人。崇禎十三年庚辰科（一六四〇）三甲四十九名の進士。）の申文（上申書）に則ち云う「舊撫（前任の河南巡撫の李仙鳳）の盤兌（持ち込む）して交付する五萬有奇あり」と。之を監紀（監督）する趙同知に問うに「原銀 約十六七萬有り。一時（同時）に舊撫に従いて雒（洛陽）に入る。將士 <sup>おお</sup>率多く分取するも、[約十六七萬から十萬を差し引いた]餘の六萬有餘に止まる」と云う。則ち趙同知は活口（生き証人）として尙お以て得て詢う可きなり。偽官の張旋告等 原と係れ獻策（獻策）して賊に従う。脅従と爲すに非ず。舊撫（李仙鳳） 雒（洛陽）に至り業已に其の典刑を正し、其の蓋藏を搽す。遺す所の粟を聞くに至りては、數百石に過ぎず。臣（高名衡） 雒（洛陽）に至りし時に則ち已に化して烏有と爲るなり（『明清史料』壬編・第五本・「細察失領（雒）根因并城内情形據實奏聞仰乞聖鑒」題本・四一四頁）。

賊が遺棄した銀米は、人々の噂では數十萬あったといいます。そして原任の洛陽知縣の張正學の申文（上申書）に、「舊撫（前任の河南巡撫の李仙鳳）が持ち込んで交付した五萬あまりがありました」とあります。このことを監督した趙同知に問うたところ「もともと銀は、約十六七萬ありました。同事に舊撫（前任の河南巡撫の李仙鳳）とともに洛陽に入り、將士たち

は多く分かち合いましたが、[約十六七萬から十萬を差し引いた]余りの六萬ばかりに止まりました」と申しました。趙同知は、生き証人として、まだ問い正すことができます。偽官の張旋告などは、もとより賊に献策して従ったものです。脅されて従ったものではありません。舊撫（前任の河南巡撫の李仙風）が洛陽に到着して、すでに処罰いたしました。そして、その覆い隠した藏を捜しました。また、遺棄された粟について聞きましたが、數百石にすぎなかったとのことです。臣（高名衡）が、洛陽に参りました時には、こうしたものはすでに化して烏有となっておりました、と高名衡はいう。

洛陽城内には、予想されたほどのものは残されていなかったのである。

そして、洛陽城内の人たちの悲惨な状況を報告する。

該臣（高名衡）等 看得（考える）するに、雒（洛陽）城の失うの始まりは、王鎮<sup>①</sup>の貪婪（貪欲）淫虐（淫亂暴虐）もて將士の離心あるに由る。故に毒や鳩<sup>あた</sup>の人に中（中人：人を傷つける）が如く、一たび發すれば、解救（救い出す）す可きも莫し。「一人貪戾、一國作亂（一人 貪戾なれば、一國 亂を作す）」（『大學』傳第九章）との聖人の言 定めて誣<sup>いつわり</sup>ならず。遂に親藩をして慘禍（悲惨な災禍）あらしめ、舉國（人々）をして沉冤（雪ぐことのできないやるせなさ）あらしむに至る。紳衿の血は兇鋒に濺がれ、士女の天（灰）は烈燄に飛ぶ。梁の間の組繫は盡く烈女・忠臣の爲なり、井底の泥沉 俱に是れ韶顏稚齒（かわいらしい兒童）なり。碧瓦・朱樓 總べて煨燼（灰燼）と成り、青憐（憐）白骨晝に荒烟（荒涼とした場所）に起く。瓦礫の叢中は、惟だ（原注：疑うらくは脱することあらん）骸殘骸の委棄（棄置）あり、頽垣（くずれた牆）の影裏には但だ孤兒・寡婦の哭聲あり。且（目）にして見るに忍びず、耳にして聞くに忍びざる者有り。況んや兵荒の後、繼ぐに瘟疫（伝染病）を以てし、一日にして十に其の五を死に、一家にして十に其の七を病む。呻吟の聲 街衢<sup>とど</sup>に徹き、棺槨の求 市肆に空し。故に臣（高名衡） 謂えらく、一たび行きて雒（洛陽）に至りて、腸斷（極度に悲痛する）して涙下らざる者は、此れ[心]中に必ず人心無き者なり（『明清史料』壬編・第五本・「細察失領（雒）根因并城内情形據實奏聞仰乞聖鑒」題本・四一四頁）。

①この題本の前段に王紹禹が貪婪であったために配下の將兵が賊に通じ、落城に至ったことが述べられる。

また、この疏には、福王が貪婪であるという記載はない。そこからすると、この「王鎮」は、總兵官の王紹禹のことを指していると考えられる。

私たち臣下が考えますに、洛陽城が陥落したのは、王鎮（總兵官の王紹禹）が貪欲で淫亂暴虐であったため士卒の気持ち離れていったことによります。そのため毒や鳩毒<sup>あた</sup>が人をそこなうように、ひとたび毒に中<sup>あた</sup>つてしまえば、救い出せません。「ただひとりが貪欲で道にもとるような人間であれば、国全体が乱を起こすようになる」（『大學』傳第九章）という聖人の言葉は、さすがに誣<sup>いつわり</sup>ではありません。こうしたことから、とうとう親藩に悲惨な災禍をもたらし、人々を雪ぐことのできないやるせない状況に追い込むに至りました。紳衿の血は凶悪な刀にそそが

れ、人々の灰は烈しい炎に舞いました。梁の組み合わせの材木は、すべて烈女・忠臣が自死するためのものとなり、井戸の底の泥は、すべてかわいい子供です。碧瓦（深緑色の瑠璃瓦）・朱樓（華美な楼閣）は、すべて灰燼となり、青憐（鬼火）・白骨は、昼間から荒廃した場所に見られます。瓦礫の中には、骨が遺棄され、傾き壊れた塀のうしろからは孤児・寡婦の泣き声がします。見るに忍びず、聞くに堪えないものです。まして、戦乱の荒廃の後に伝染病が流行し、一日で十人のうち五人が亡くなり、一家では十人のうち七人が感染してしまっています。苦しみうめく声は街角にとどき、棺桶を求める声は市場に空しくひびいています。こうしたことから、臣（高名衡）は、ひとたび洛陽に到り、悲痛な気持ちとなって涙を流さないものは、心に人の気持ちを持ちあわせていないものであると申し上げます、と高名衡はいう。

すべては、總兵官の王紹禹が強欲で、部下の兵士の気持ちが離れて行ったことに起因するといふのである。

こうして、洛陽を再建すべきであることを報告する。

目今、王居 一つの瓦の用いる可き無く、官署の一つの<sup>たるき</sup>椽の用いる可き無し。城の掘毀されし者は築くを待ち、兵民の傷之（亡）する者は復するを待つ。國家の若何なる工力を費やし、而して始めて此の雒（洛陽）城を再造するかを知らざるなり。知府の郭載驥（乾隆十年重修『洛陽縣志』卷之九・職官・二十三葉に「〔河北〕深州人。舉人」）賊の<sup>のこ</sup>遺す所の銀を以て留めて雒陽（洛陽）の新造する・墻垣を修理する・兵馬を供應するの用と爲さんことを請う。然れども數は二萬有奇に過ぎずと爲す。能く何事を<sup>な</sup>作さん。則ち趙同知の云う所の十七萬は、或いは尙お當に以て之を清察（はっきりと調査する）すべきか。速やかに各官を補するに至れば<sup>す</sup>既已に奉けたる旨あり。然れども補する所の者は、僅かに雒（洛）城の道・府廳縣の各官なるのみ。屬縣の永寧・登封・新安・宜陽・靈寶の<sup>こと</sup>若きは、則ち縣に一の官無きを以て土賊 之に乘じ、搶麥刼（劫）財し（穀物や財産を奪う）、入城して殺掠す。已に委署（代理）官に委ぬと雖も、亦た彈壓し難し。并せて速やかに遴補（選補）を賜い以て地方を安んぜんことを乞う。汝（汝州）に至れば、雒（洛陽） 相い唇齒と爲す。而して汝（汝州）の州官は、更に一時の難缺なり。伊陽の<sup>す</sup>已經に填補さるを除くの外、他の郟縣・豐縣の士民の官を望むは、望歲（豊年を望む）の如し。懇乞するに一併に狀（壯）年の風力（氣概と魄力）ある者を擇びて速やかに補し、即ち之に勒し任に到らしめ、以て土孽（地元の悪人）<sup>したがわ</sup>を弭せ、殘黎（疲敝した民眾）を衛るに于いて其の地方を<sup>たす</sup>裨くるは、小に非ざる有るなり。士紳婦女の死節の情狀の一一細察に明白にするを俟つを除き、別に報外す。謹みて先ず聞く所の者を述べること此の如し（『明清史料』 壬編・第五本・「細察失領（雒）根因并城内情形據實奏聞仰乞聖鑒」 題本・四一四頁）。

現在、王府はひとつの瓦ですら利用できるものはなく、役所はひとつの<sup>たるき</sup>椽ですら利用できるものはありません。掘り返されて破壊された城壁は、新たに作り直すのを待っていますし、兵士や人々で傷ついた者たちは癒えるのを待っています。国家のどれくらいの工費を費やして、やっ



とこの洛陽城を再建できるかわかりません。知府の郭載駭は、賊が棄てて行った銀を留めて、洛陽の再建・城壁の修復・兵士に与える物資の費用にしたいと願ひ出ております。ですが、それは二萬あまりにすぎません。何事ができるでしょうか。趙同知の申しました十七萬は、あるいはやはりこれをはっきりと調査すべきでしょうか。速やかにそれぞれの官員を補任することについては、すでに旨（皇帝の指示）がございます。しかしながら、補任する官員は洛陽の道府廳縣の各官にすぎません。河南府に所属する永寧縣・登封縣・新安縣・宜陽縣・靈寶縣などは、縣にひとりの官員もいないことから、土賊がそれに乗じて穀物や財産を奪い、縣城に入つて殺戮しております。すでに代理の役人に委任しているのですが、やはり安定させることは難しいようです。そこで、すみやかに役人の補充任命を行なつていただき、地域を落ち着かせることをお願いいたします。汝州については、洛陽と持ちつ持たれつに関係にあります。その上、汝州の知州のポストは、当代の困難なポストになります。伊陽のポストが補充されたのを除くと、その他の郟縣・豐縣の人々が役人の赴任を望むことは、豊年を待ちわびるようなものです。ひとえに壮年の気概と胆力のある人物を選び出して任命し、赴任させ、土孽（地元の悪人）を服従させ、殘黎（疲敝した人たち）を保護して其の地方を助けることは、小さいことではありません。読書人や婦女の殉節の状況は、ひとつひとつ事細かく明白にすることを除いて、別に報告いたします。謹んで聞き及びましたことを以上のように申し上げます、と高名衡は報告を結ぶのである。

### ③福王世子由崧の避難

いま検討した欽差巡撫河南の高名衡の「細察失領（雒）根因并城内情形據實奏聞仰乞聖鑒」題本によれば、洛陽陷落の直後、福王の世子由崧は黄河を渡って孟縣に逃げ、孟縣知縣の張兆熊（注3参照）に保護される。

時に于いて福王世子 縋城（城壁からたらしした縄によって降りる）して東行す。賊 遂に  
つめかけ擁至る。世子 驚散（びっくりして逃げ出す）し、河を渡る。孟縣知縣の張兆熊 聞知（知道）し訪尋し迎えて城内に入れしむ（『明清史料』壬編第五本・「細察失領（雒）根因并城内情形據實奏聞仰乞聖鑒」題本・四一三頁）。

この時、福王世子の由崧は、城壁からたらしした縄によって降りて東に逃げた。賊が詰めかけてきた。世子の由崧は、びっくりして逃げ出し、黄河を渡った。孟縣知縣の張兆熊は、それを知り、探し出して城内に迎え入れた、という。

陳燠（字は允業、号は士達・允業・瀧業。河南孟津の人。崇禎十六年癸未科（一六四三）三甲九十五名の進士）は、南明政権成立後に提出した上奏文で、福王弘光帝を護衛して黄河を渡った時のことにふれている。

青浦知縣の孟津〔出身の〕陳燠<sup>7)</sup> 奏すらく、「崇禎十四年正月、雒（洛）陽 守りを失う。臣（陳燠）舟もて聖駕を陳家河に迎え、北のかた黄河を渡る。麥餅（小麦粉で作った餅）

を進め、再び夾河を渡り、孫家灘に駐<sup>とど</sup>まる。賊 追うに及ばず。臣（陳燠） 夜に粥を進め、凌晨（明け方）に駕を送る。今年（崇禎十七年）三月二十五日、臣（陳燠） 淮安に謁す。〔福王弘光帝は〕面諭して『舊勞（多年の勞績）あり』と。臣（陳燠） 且つ感じ且つ愧ず。謹みて中興の大務の四事を陳ぶ。〔それは〕「天を敬して以て人心を収む」、「祖を法とし以て久安を貽る」、「人を用いて以て股肱と爲す」、「進講 以て經筵を御す」なり。〔この後も〕倘し面対を蒙れば、少しく愚悃（自己の誠意）を進めん」と（『國榷』卷一百二・「思宗崇禎十七年七月甲午（九日）」条・六一二九頁）。

崇禎十四年一月に洛陽が攻め落とされる。陳燠は、舟を出して福王世子由崧（福王弘光帝）を陳家河に迎え、黄河を渡った。麥餅（小麦粉で作った餅）を召しあがっていただき、さらに夾河を渡って、孫家灘に留まった。賊は追いかけてこなかった。陳燠は、夜に粥を提供し、明け方に送り出した。今年（崇禎十七年）三月二十五日、陳燠は、淮安で福王由崧（福王弘光帝）

- ✓ 7) 陳燠、字は允業、号は士達・允業・瀧業。河南孟津の人。崇禎十六年癸未科（一六四三）三甲九十五名の進士である。したがって、福王世子由崧を守って黄河を渡ったのは、進士になる前のことであった。

光緒『青浦縣志』（卷十三・職官上・四葉）によれば、陳燠は、崇禎十七年に青浦縣知縣（從七品）となっている。そして、『南渡錄』によれば、京官への配置転換を求めて、崇禎十七年九月十七日に中書舍人（從七品）に改められる。ただし、さらなる昇進の選考を求めたものの、認められなかったという。

〔崇禎十七年九月〕壬寅（十七日）、青浦知縣の陳燠を中書舍人に改む。

〔陳〕燠 嘗て帝（福王弘光帝）に風塵に遇う。〔そして〕自から疏して内轉を請うて、之を允<sup>ゆる</sup>さる。尋いで又た考選（昇進選考）を請う<sup>①</sup>も、允<sup>ゆる</sup>されず（『南渡錄』卷之三・「崇禎十七年九月壬寅（十七日）」条）。

①『明季南略』卷之三に「〔順治二年／弘光元年二月〕十二乙丑・・・中書の陳燠 自から擁護するに勞（功績）有り」と陳べ、考選を與えられんことを願うも、許されず（『明季南略』卷之三・「二月甲乙史」条）とある。

屈大均（原名は紹隆、或いは邵龍、字は翁山、一字は冷君。廣東番禺の人。崇禎三年（一六三〇）～？。明季の諸生）の『皇明四朝成仁錄』は、陳燠についてつぎのよういう。

陳燠、字は胤業、孟津の人なり。崇禎十六年の進士なり。〔江蘇〕青浦知縣を授けらる。將に任に赴かんとするに、會たま弘光 登極すれば、〔陳燠は福王弘光帝（福王由崧）に〕南京に朝（朝見）す。上（福王弘光帝） 初め潛邸（即位前）に在りて之を識る。〔そこで〕中書舍人に改む。子の伯俞〔崇禎十五年の舉人に中（ごうかく）す。上（福王弘光帝） 出狩する時、〔陳〕燠 駕を追わんと欲するも、及ばずを慮り、遂に之に死す。〔陳〕伯俞 父の屍を抱きて慟哭し、亦た死す（『皇明四朝成仁錄』卷六・南都死節諸臣傳・「陳燠」条）。

陳燠、字は胤業、河南孟津の人で、崇禎十六年癸未科（一六四三）三甲九十五名で進士となり、江蘇青浦縣知縣に任命される。赴任しようとした時、たまたま福王由崧が即位し、陳燠は福王弘光帝（福王由崧）に南京で朝見した。上（福王弘光帝）は、もともと即位前から陳燠を知っていた。そこで、陳燠を外官の青浦縣知縣から京官の中書舍人に改めた。陳燠の子供の陳伯俞は崇禎十五年（一六四二）に舉人となっていた。上（福王弘光帝）が北京に連行される時、付き従いたいと望んだが、かなわないことを慮って、亡くなる。陳伯俞も父親の亡骸を抱き慟哭して亡くなった、という。

高承埏（字は愚公、一字は澤外。浙江秀水の人。崇禎十三年庚辰科（一六四〇）三甲六十八名の進士）の『自靖錄考略』（咸豐戊午（咸豐八年：一八五八年）嘉興竹里王氏槐花吟館刊本）では、

中書舍人の陳燠、字は允業、號は士達。河南孟津の人。崇禎癸未の進士なり。子の壬午（崇禎十五年）の舉人の陳伯俞と俱に自縊して之に死す。一に云う、中書の陳士達（陳燠）は、上元の人なり、と（『自靖錄考略』卷四・江南殉難上・江南府順治乙酉・「陳燠子伯俞」条・三葉）。

とあり、自縊したとはっきりという。

に拝謁した。福王由崧（福王弘光帝）は、「旧年の功績」について言及してくださった。陳燠は、感じ入りまた恥じながら、謹んで明朝を中興する四つの大務を述べました。それは、「天を敬して以て人心を収む」、「祖を法とし以て久安を貽る」、「人を用いて以て股肱と爲す」、「進講以て經筵を御す」です。この後、もしも拝謁がかなうならば、僅かではあるが愚悃（自己の誠意）をお示したい、と上奏したという。

陳燠によれば、洛陽陷落後、福王世子由崧は、陳家河から黄河を渡り、さらに夾河を渡って孫家灘に至ったというのである。

この時のことだと考えられるが、孟津縣の王鏞と王無黨<sup>8)</sup>とが、福王世子由崧の黄河渡航の援助を行っている。南明政権成立後、二人は、この功績によって、錦衣衛指揮僉事に任命される。

- 8) 王鏞について、兄弟の王鐸（河南孟津の人。天啓二年壬戌科（一六二二）三甲五十八名の進士）の『擬山園選集』はつぎのようにいう。

王鏞、諸生。准貢と爲る。渡河擁護の功を以て世蔭錦衣衛指揮僉事たり……後、〔順治三年（一六四六）四月八日に〕 睢陳道僉事と爲る。又た冀寧道僉事と爲り、〔そして、順治五年（一六四八）九月十九日に〕 浙（浙）江布政司金衢道右叅議に陞る（『擬山園選集』卷七十六・王氏譜・「王鏞」条・十七葉）。

①乾隆四年重修『大清世祖體天隆運定統建極英睿欽文顯武大德弘功至仁純孝章皇帝實錄』卷之二十五・「順治三年四月甲申（八日）」条に「……王鏞 睢陳道〔僉事〕に委署（官員事務の代行）するも、……旨もて定奪（官員の選考の認否）するを請う、と。旨を得て、……王鏞は、道（睢陳道僉事）を以て用いよ……」とある。

②乾隆四年重修『大清世祖體天隆運定統建極英睿欽文顯武大德弘功至仁純孝章皇帝實錄』卷之四十・「順治五年九月庚辰（十九日）」条に「山西冀寧道僉事の王鏞もて浙江布政使司叅議と爲す」とある。

王鏞は、明の諸生。福王の世子由崧（後の福王弘光帝）の黄河渡航を護衛した功績で、南明政権で世蔭錦衣衛指揮僉事に任ぜられる。後、清政権に降り、順治三年（一六四六）四月八日に睢陳道僉事に任命され、冀寧道僉事をへて、順治五年（一六四八）九月十九日に浙江布政司金衢道右叅議となる。

王無黨について、父の王鐸（河南孟津の人。天啓二年壬戌科（一六二二）三甲五十八名の進士）の『擬山園選集』はつぎのようにいう。

王無黨、字は大公。廩生貢元。渡河擁護の功を以て世襲錦衣衛指揮僉事たり。〔そして〕都指揮掌衛事同知に陞る。〔清朝に投誠し、順治四年（一六四七）九月二十九日に〕 山西分巡河東鹽政、整理錢法平陽兵備道僉事に改め授けらる。〔そして、順治八年（一六五一）十月二十一日に〕 山東布政司濟南道右叅議に陞る。負氣（意気込んで）に讀書し、天下を視て足る無しとし、以て其の意に當る者は、善く射するの禦侮（武臣）なりとす。乙丑（康熙二十四年：一六八五年）、姜賊の亂に會し、屬する所の諸城俱に潰ゆ。〔しかし、王無黨は〕陣の登り衆に誓いて、晝夜十七日 火礮を備え、矢石を冒す。城危うくして、復た安んず。數十萬の命を全活（保全）す。今に至るも平水（山西臨汾縣）之を祠る……季（年少）の四十一〔歳で〕疾を以て終う（『擬山園選集』卷七十六・王氏譜・「王無黨」条・十九葉）。

①乾隆四年重修『大清世祖體天隆運定統建極英睿欽文顯武大德弘功至仁純孝章皇帝實錄』卷之三十四・「順治四年九月丙寅（二十九日）」条に、「投誠する指揮同知の王無黨を以て、山西按察使司僉事、分巡河東道と爲す」とある。

②乾隆四年重修『大清世祖體天隆運定統建極英睿欽文顯武大德弘功至仁純孝章皇帝實錄』卷之六十一・「順治八年十月乙丑（二十一日）」条に「山西僉事・河東道の王無黨 山東布政使司叅議・濟南道と爲す」とある。

③明の大同總兵官で清政権に降り、そのまま大同總兵官を任命されていた姜瓖の清政権に対する叛亂は、順治五年（戊子）十二月に始まり、順治六年（己丑）八月に鎮圧される。したがって、この「乙丑」は、「己丑」の誤字ではないかと推測できる。

また、『清史列傳』は、貳臣傳乙に列せられた王鐸傳に附して、王無黨をつぎのようにいう。

『明季南略』では、つぎのようにいう。

六月廿二日、福府千戸の常應俊<sup>9)</sup>を封じて襄衛伯と爲し、青浦知縣の陳燠を補して中書舍人と爲し、王鐸の弟の〔王〕鏞・子の〔王〕無黨に世襲錦衣指揮使を予う。蓋し〔常〕應俊は、本と革工なり。弘光（福王弘光帝）の出亡するに値りて、〔常〕應俊之を負いて雪中數十里を行き、難を脱す。〔王〕鏞・〔陳〕燠・〔王〕無黨は、俱に扈衛し功有る者なり（『明季南略』卷之二・「封常應俊」条）。

六月二十二日、福王府の千戸の常應俊を襄衛伯に封じ、青浦知縣の陳燠を中書舍人とし、王鐸の弟の王鏞と王鐸の子の王無黨に世襲錦衣指揮使をあたえた。おそらく常應俊は、もともと革工（革細工）で、弘光（福王弘光帝）の避難する時に、福王弘光帝を背負って、雪道を数十里も行き、危機を脱したからであろう。王鏞・陳燠・王無黨は、みな福王弘光帝につき従った功績があったからである。

日付はないが、王鐸の『擬山園選集』にも、

王鏞、諸生。准貢と爲る。渡河擁護の功を以て世襲錦衣衛指揮僉事たり……（『擬山園選集』卷七十六・王氏譜・「王鏞」条・十七葉）。

王無黨、字は大公。廩生貢元（貢生の尊稱）。渡河擁護の功を以て世襲錦衣衛指揮僉事たり。〔そして〕都指揮掌衛事同知に陞る……（『擬山園選集』卷七十六・王氏譜・「王無黨」条・十九葉）。

とあり「渡河擁護」の功によるという。

ちなみに、王鏞の弟で、王無黨の父の王鐸も、南明政権で重用されているので、やはりこのことにかかわっていたと推測できる。

屈大均（原名は紹隆、或いは邵龍、字は翁山、一字は冷君。明季の諸生）は、『皇明四朝成仁錄』で、つぎのようなコメントを述べる。

〔河南〕孟津は、蕞爾（ごくちっぽけな）なる小邑なり。陳氏父子・叔姪・兄弟及び王鐸父子・兄弟 皆な文章科第を以て顯わる。上（福王弘光帝）の敵（李自成）を孟津に避くるや、〔王〕鐸父子・兄弟及び〔陳〕燠 皆な嘗て左右に在り。上（福王弘光帝）の登極するに、舊恩を推<sup>おしはか</sup>り、〔王〕鐸を以て禮部尚書と爲し、入閣して辦事（事務を処理する）さす。弟の〔王〕鏞・子の〔王〕無黨も各々世襲錦衣衛指揮使たり。〔上（福王弘光帝）の〕

---

〔王鐸の〕長子の無黨、初め明に仕えて指揮同知たり。本朝に入り、山西河東道に官たり。姜瓖 叛するの時、巡撫の祝世昌 其の賊を禦ぐに功有りと奏す。尋いで濟東道に遷る（『清史列傳』卷七十九・貳臣傳乙・「王鐸子無黨」条）。

王無黨は、字は大公、明の時の廩生。福王の世子由崧（後の福王弘光帝）の黄河渡航を護衛した功績で、南明政権で世襲錦衣衛指揮僉事に任ぜられる。後、清政権に降り、順治四年（一六四七）九月二十九日に山西分巡河東鹽政、整理錢法平陽兵備道僉事に任命され、順治八年（一六五一）十月二十一日に山東布政司濟南道右參議に昇進する。山西分巡河東鹽政、整理錢法平陽兵備道僉事であった時、姜瓖の叛乱鎮圧に功績があった、という。

恩 亦た厚し。敵（清政権の軍）至り，[王] 鐸と子・弟等 復た高爵を膺く。李明睿曰く，敵 未だ南下せざる時，[王] 鐸 先ず降書有りて新廷に在り，と（『皇明四朝成仁録』巻六・南都死節諸臣傳・「陳燠」条）。

河南孟津は，ごくちっぽけな邑である。陳氏や王氏の一族は，みな科挙によって名高い。上（福王弘光帝）が李自成の軍から避難してきた時，王鐸父子・兄弟と陳燠は，上（福王弘光帝）の左右に侍っていた。上（福王弘光帝）が即位すると，そのもとの恩義を推し量って，王鐸を禮部尚書とし，入閣して事務を処理させた。王鐸の弟の王鏞と王鐸の子供の王無黨もそれぞれ世襲錦衣衛指揮使となった。上（福王弘光帝）の恩義は，はなはだ厚かったのである。清政権の軍がやってくると，王鐸とその子と弟は，また高い爵位を授けた。李明睿は，「清政権の軍がやってくる前に，王鐸はまず降伏の文章を書いて，清政権の宮中にいた」と言った，という。

- ✓ 9) 六月二十二日，福王府の千戸であつた常應俊は，福王の世子由崧（後の福王弘光帝）を護衛した功績で襄衛伯に封ぜられる。南明政権が崩壊すると，清政権に降る。順治「實錄」によると，行禮定國大將軍和碩豫親王多鐸らの順治二年五月二十八日の上奏文に，清政権の軍が南京に進駐した時に出迎えた官員の中に，「項城伯常應俊」の名が見える。

……十五日，我軍 南京に至る。忻城伯の趙之龍，魏國公の徐州爵，保國公の朱國弼，隆平侯の張拱日，臨淮侯の李祖述，懷寧侯の孫維城，靈璧侯の湯國祚，安遠侯の柳祚昌，永康侯の徐弘爵，定遠侯の鄧文固，項城伯の常應俊，大興伯の鄒順益，寧晉伯の劉允基，南和伯の方一元，東寧伯の焦夢熊，安城伯の張國才，洛中伯の黃周鼎，成安伯の柯祚永，駙馬の齊贊元，内閣大學士の王鐸，翰林程正の揆張居，禮部尚書の錢謙益，兵部侍郎の朱之臣・梁雲構・李綽，給事中の林有本・陸朗・王之晉・徐方來・莊則敬及び都督十六員，巡捕提督一員，副將五十五員を率い，并せて城内の官民と迎え降る……（乾隆四年重修『大清世祖體天隆運定統建極英睿欽文顯武大德弘功至仁純孝章皇帝實錄』巻之十六・「順治二年五月己酉（二十八日）」条）。

そして，順治四年五月二十一日に，賊黨の王道士と通謀したとして，誅せられる。

〔順治四年五月〕辛酉（二十一日）……投誠伯常應俊，總兵の李際遇・馬儒齊・黃明先・丁啓光，副將の王士永・一把撒・夏五岳・賈應遠・駱和蕭・劉方侯，參將の喬松，遊撃の滕和齊・于起範・馮可松・傅有功，都司馬の崇臣・衛士龍，守備の李豪・張嵩，閒散官の丁啓睿等，賊黨の王道士と通謀するに坐して，其の兄弟及び子と併せて俱に誅に伏す（『大清世祖體天隆運定統建極英睿欽文顯武大德弘功至仁純孝章皇帝實錄』巻之三十二・「順治四年五月辛酉（二十一日）」条）。

なお，『明季南略』（康熙十年（一六七一）に脱稿）では，義に殉じた人たちのなかに，宦官と乞兒がいたことを紹介する。

〔清朝の軍が南京に進駐してから義に殉じた人たちを列举し〕……死するも名を知らざる者は，秦淮河中に投ずる馮小璫と百川橋の下の乞兒なり。小璫は色を以て〔幸せられ〕，卒に身を以て殉ず。乞兒は詩を橋上に題して，「三百年來 養士の朝，文武 盡く皆な逃ぐるを如何せん。綱・常（三綱五常）は卑田院に留まりて在り，乞丐 命一條を存するを羞ず」と云う有り（『明季南略』巻之四・「南京遇變諸臣」条）。

そして，『明季南略』の著者の計六奇（字は用賓，号は天節子，別に九峰居士と書す。江蘇無錫の人。諸生。明・天啓二年（一六二二）～？）は，つぎのような意見を書いている。

弘光の時，古史 經て見ざる者の二事有り。其の始めて〔南明政権を〕立つるや革工の常應俊 伯に封ぜらる。其の〔南明政権の〕失するに及ぶや乞兒 難に死す。一は勳臣，一は忠臣の異なりあり。然れども伯に封ぜらるるは，遇なり，〔常〕應俊爲るは易し。難に死するは，義なり，乞兒爲るは難し。予（計六奇） 思うに乞兒は常の人に非ず，蓋し隱君子なり。一死を以て當時の大臣の乞兒に如かざる者を愧じんと欲す八月初一 書す（『明季南略』巻之四・「南京遇變諸臣」条）。



なお、任命の日付については、『明季甲乙兩年彙畧』には、「太后の從人」として、

〔崇禎十七年十月乙卯朔〕太后の從人の庸（<sup>ママ</sup>鏞）・王無黨 世々指揮（南京錦衣衛指揮僉事）を授く（第二卷・「〔崇禎十七年〕十月乙卯朔」条）。

として、崇禎十七年十月朔日とする。また、『國榷』も、この任命を崇禎十七年十月朔日に掛けている。

〔崇禎十七年十月乙卯朔〕王庸（<sup>ママ</sup>鏞）・王無黨 世々南京錦衣衛指揮僉事を授く。俱に大學士の王鐸の子なり。舟もて慈鑾（福王世子由崧の車駕）を渡すを以てなり（『國榷』卷一百一・「思宗崇禎十七年十月乙卯朔」条・六一五三頁）。

この後、福王の世子由崧はどこで避難していたのかはよく分からない。ただ、『綏寇紀略』に、つぎのように記す。

・・・審理の李春茂，典膳の張守賢，典樂の劉文魁 縋城（城壁からたらしした縄によって降りる）して遁ぐ。世子も亦た走げ免る。官兵に遇い，腰に寶物有るを疑われ，其の裳を裂かれ，道の旁に裸露（身ぐるみはがれる）す。一の護衛軍を得て牽挽され河（黄河）を過ぎ，孟縣に廬（廬に居て守喪に服す）す・・・（『綏寇紀略』卷八・汴渠塾）。

審理の李春茂，典膳の張守賢，典樂の劉文魁は，城壁からたらしした縄によって降りて逃げた。福王世子由崧も逃げ出して脱出できた。しかし，官兵に出会い，腰に宝物を付けているのではないかと疑われ，着物を裂かれて，道のかたわらで身ぐるみはがれた状態でいた。たまたま，ひとりの護衛軍がいて，福王世子由崧をひっぱって黄河を渉り，孟縣で喪に服した，という。ここで「孟縣に廬（喪に服した）す」と記されていることからすると，洛陽脱出後は孟縣に滞在していたのかもしれない。なお，これまで検討してきたように黄河を渉る時には，孟津の王鏞・王無黨・陳燠などの人たちが援助したとあるので，「一の護衛軍」が連れて渡ったとは言うのは誇張しすぎではないだろうか。

しかし、『國榷』によると，崇禎十四年九月十日に洛陽に戻るよう命ぜられている。

〔崇禎十四年九月〕癸未（十日），福世子由崧に命じて河南に還らしむ（『國榷』卷九十七・「思宗崇禎十四年九月癸未（十日）」条・五九〇六頁）。

ただ，崇禎十五年十月二十五日に洛陽は，ふたたび闖軍によって攻め落とされる。

〔崇禎〕十五年十月二十五日，闖寇 再び郡城（郡治の所在地）を陷す（乾隆十年重修『洛陽縣志』卷之十・祥異・十一葉）。

この時，洛陽城の城壁は破壊されていたため（乾隆十年重修『洛陽縣志』（卷二・地理・十八葉）に「闖寇 洛を陷し，民を屠り，平城・土城 一時並びに毀たる」とある），籠城もできず，福王の世子由崧はまた逃げ出したと推測できる。

この後、『山陽縣志』卷二十一・雜記二・「崇禎十七年三月・四月」条の所引の『淮城日記』・「路振飛傳」（光緒『淮安府志』（卷四十・雜記・二十二葉～二十二葉）も同じ）に「河南の亂れてより後，國母と懷慶に寄居す」とあるので，河南懷慶にいたようである。そして、『國榷』

によると、崇禎十七年正月に河南懷慶も危なくなっただので出発したと記されている。

〔崇禎十七年〕正月庚寅朔、〔福王由崧〕寇警（敵軍の侵入警報）の迫まるを聞き、懷慶を發す（『國權』卷一百一・「思宗崇禎十七年正月庚寅朔」条・六〇六六頁）。

なお、避難中の崇禎十六年五月癸丑（二十一日）に、福王世子由崧は、福王を嗣ぎ、福王世子から福王となる。

〔崇禎十六年五月癸丑（二十一日）〕福世子由崧 福王を嗣ぐ（『國權』卷九十九・「崇禎十六年五月癸丑（二十一日）」条・五九七七頁）

さて、福王由崧は、崇禎十七年正月五日に、金寶の再交付を願い出ている。『國權』卷一百・「思宗崇禎十七年一月甲午（五日）」条・六〇一三頁

福王由崧 前寇に金寶を失う。<sup>①</sup>〔そこで〕補給を請う（『國權』卷一百・「思宗崇禎十七年正月甲午（五日）」条・六〇一三頁）。

①欽差巡撫河南の高名衡の報告によると、「世子の冊・寶 亦た幸いに見在（現存）し保護さる」とあるので、洛陽が初めて攻め落とされた崇禎十四年正月の時には、福王世子の金寶は残っていた。

『明季南略』所引の「紀」には、「玉寶<sup>ママ</sup>」についての奏上を行なったことを記した後に、「蓋し」として「福王世子は、自分の玉寶<sup>ママ</sup>を竊<sup>ぬす</sup>んで賊に贈っていた」という憶測が付け加えられている。

『紀』に云う、福嗣王（福王世子由崧）奏すらく、「玉寶<sup>ママ</sup> 實に係れ存する無し」と。蓋し世子爲りし時、自ら竊<sup>みずか</sup>みて以て賊に送りし者なり。福嗣王は、即ち帝（福王弘光帝）なり<sup>①</sup>（『明季南略』卷之一・甲申四月五月事・「赧皇帝」条）。

①『明季甲乙兩年彙畧』（卷之一・「崇禎十七年正月甲午（五日）」条・二葉）・『明季甲乙彙編』（卷之一・「崇禎十七年正月甲午（五日）」条）にも、福嗣王（福王世子由崧）奏すらく、「玉寶<sup>ママ</sup> 實に係れ存する無し」と。蓋し世子爲りし時、自ら竊<sup>みずか</sup>みて以て賊に送りし者なり」と記す。

なお、この憶測について、すでに徐鼎<sup>し</sup>（字は彝舟、号は亦才。江蘇六合の人。嘉慶十五年（一八一〇）～同治元年（一八六二）。道光二十五年乙巳恩科（一八四五）三甲六十六名の進士）が『小腆紀年附考』（咸豐十一年〔一八六一〕成）において、つぎのような意見を述べている。

徐鼎 曰く、……南都 君を立てるに、福王の不忠不孝の議有り。〔そして〕「王寶<sup>ママ</sup> 存する無きは、世子（福王由崧）竊<sup>ぬす</sup>みて以て賊に獻ずと爲す」と疑う者有るに至る。〔福王〕由崧 愚なりと雖も、胡ぞ樂しみて此れを爲さんや。此れ蓋し之を惡む者の已甚だしきの詞、篤論に非ざるなり（『小腆紀年附考』卷第三・「〔崇禎十七年二月〕壬戌（三日）、闖賊陷明懷慶、廬江王載堙及其子翊櫬死之。福王由崧走衛輝」条）。

南明政権で、天子を擁立するのにあたって、福王由崧が「不忠不孝」であるとの議論があった。そして、「王寶を失ってしまったのは、福王由崧が王寶<sup>ぬす</sup>を竊んで賊に獻じたためである」と疑うものが出てきた。福王由崧が愚かであっても、どうして喜んでこのようなことをするのだろうか。これは、福王由崧をよく思わない者の極論で、適切な意見ではない、と徐鼎はいう。

さて、『明季南略』によれば、懷慶が陥落したのは二月三日（『國榷』によれば二日）であり、福王由崧は、母の鄒氏を軍中に置き捨てて、急いで衛輝府に逃げ込み潞王をたよった、と記される。

十七年二月三日壬戌、懷慶府 夜變あり。帝（弘光帝：福王由崧） 母（鄒氏）と東門を走り出で、母を兵の間に棄つ。狼狽（急いで）して衛輝府に走り潞王を<sup>たよ</sup>る（『明季南略』卷之一・「赧皇帝」条）。

『國榷』卷一百・「思宗崇禎十七年二月辛酉（二日）」条においても同様の事を伝えているが、「[崇禎十七年] 正月庚寅朔、[福王由崧] 寇警（賊軍の侵入警報）の迫まるを聞き、懷慶を發す」（『國榷』卷一百一・「思宗崇禎十七年正月庚寅朔」条・六〇六六頁）とも記し、それぞれの日付が混乱している。

[崇禎十七年二月辛酉（二日）] 懷慶府 守らず、福王[由崧] 出奔す。太妃と相い失う。遂に衛輝に至り、潞王を<sup>たよ</sup>る（『國榷』卷一百・「思宗崇禎十七年二月辛酉（二日）」条・六〇二一頁）。

ここで、「潞王を<sup>たよ</sup>る」と記述するのは、福王由崧より潞王常滂がすぐれているという理解が前提で付け加えられたことであった。

さらに言うと、『明季南略』で「帝（弘光帝：福王由崧） 母（鄒氏）と東門を走り出で、母を兵の間に棄つ」とするのは、やはり悪意を込めた僅かばかりの書き換えではないだろうか。なぜならば、『國榷』（卷一百・「思宗崇禎十七年二月辛酉（二日）」条・六〇二一頁）と同じく、『綏寇紀略』においても、

賊 河を渡り、汾州・懷慶<sup>せめおと</sup>を陷す。福邸徳昌王 諱は由崧、即ち弘光なり 再び走り<sup>まぬが</sup>免るるも、太妃と相い失う。河北・山東の諸王 寇を避けて南下す（嘉慶九年（一八〇四）照曠閣刊『綏寇紀略』卷八・汴渠塾・二十二葉）。

と、「再び走り<sup>まぬが</sup>免るるも、太妃と相い失う」と記述しているからである。

さて、福王由崧が逃げ込んだ衛輝府も、崇禎十七年二月に潞王が出奔し陥落する。

[崇禎十七年二月] 潞藩 總兵の卜從善と十九日に南行す。二十日、賊の權將軍の劉・智將軍の陳永福 衛（衛輝府）に入る（康熙三十四年『汲縣志』卷十）。

この後、福王は南に向かう。『明季甲乙兩年彙畧』・『明季甲乙彙編』につぎのようにいう。

[崇禎十七年三月壬辰（四日）] 福・周・潞・崇の四王 各々藩を棄てて南奔す（『明季甲乙兩年彙畧』卷之一・「崇禎十七年三月壬辰（四日）」条・十三葉／『明季甲乙彙編』（卷之一・「崇禎十七年三月壬辰（四日）」条）。

『國榷』によれば、三月己朔日には、淮安に近づく。そして、道中の費用として潞王に千金を貸して援助したという。

三月己丑朔 淮安に<sup>ちかづ</sup>薄く。橐匱（旅費のことか）もて潞王に貸し千金を以て<sup>たす</sup>済く（『國榷』卷一百一・「思宗崇禎十七年三月己丑朔」条・六〇六六頁）。

同治『山陽縣志』卷二十一・雜記二・「崇禎十七年三月・四月」条の所引の『淮城日記』・「路振飛傳」には、つぎのように記す。

〔崇禎十七年〕三月六日、福・周・潞・崇<sup>10)</sup>の四藩の避難船八十餘艘〔山陽縣西湖<sup>②</sup>の〕河口に至る。〔三月〕八日、〔路〕振飛<sup>③</sup>及び撫寧（寧）侯の朱國弼<sup>④</sup>往きて見い〔避難してきた〕故を問う。船小にして暗きこと甚し。時に周王 已に病む。福王 曰く、「孤（福王由崧の自称）河南の亂れてより後、國母と懷慶に寄居す。二月十六日、變を聞きて四門 大いに啓かる。便衣（平服）もて母と偕に出行して東門に至る。門 閉じらる。久之、乃ち出ずるに忽ち母の所を失う。在今、此に至り、因りて泣き下る」と。是の日、四藩 並び集まる。〔山陽縣〕清江浦の百姓 罷市す。〔路〕振飛 千金を以て杖給し、市肆（市鎮）始めて安んず。十一日、周王 水次（船着き場）に薨じ、柩を民人の趙啓申の宅に寓<sup>⑤</sup>く。十八日、福王〔山陽縣〕湖漿<sup>⑥</sup>の生員の杜光紹の園中に寓（身を寄せる）す。二十七日、王 鎮撫に馬各々二疋を饋る。四月五日、潞王 南下す。十九日、周王の柩 南下す。二十二日、福王 啟行（出發）す（同治『山陽縣志』卷二十一・雜記二・「崇禎十七年三月・四月」条の所引の『淮城日記』・「路振飛傳」／光緒『淮安府志』（卷四十・雜記・二十二葉～二十二葉）も同じ）。

①この周王は、周王恭枵のこと。太祖洪武帝の第五子の櫛を始祖とし、開封に藩を置く。李自成によって開封が落城してからは、河南彰德府に滞在していた（『明史』卷一百十六・列傳第四・諸王一・太祖諸子一・「周王櫛」条による）。

10) この崇王が誰を指しているのかよくわからない。そもそも、崇王は、英宗の第六子の見澤を始祖とし、河南汝寧府に藩を置いていた。当時の崇王を嗣いでいた由櫛は、『明史』によれば、

崇禎十五年十一月（『明史』作「閏十一月」）、李自成 汝寧を陥し、〔崇王〕由櫛を執え去き、脅して襄陽伯と爲す（『明史』作「僞封襄陽伯」）。〔そして〕、州縣の未だ下らざる者に降るを諭せしむ。〔崇王〕由櫛 従わず。之を〔河南〕泌陽城に殺す。弟の河陽王由材・世子慈輝・次子慈烺（『明史』無「次子慈烺」）皆な害に遇う（『明史』列傳第五・諸王三・「崇王見澤」条・十七葉：『明史』卷一百十九・列傳第七・諸王四・英宗諸子・「崇王見澤」条もほぼ同じ）。

とあり、崇禎十五年十一月に李自成に拉致され、河南泌陽で弟や息子とともに殺害されたという。

ただ、『南渡錄』には、弘光元年（順治二年）二月二十三日に「慈烺」が崇王を承襲したという。

慈烺 崇王を襲封するを准す（『南渡錄』卷之五・「弘光元年（順治二年）二月丙子（二十三日）」条）。

やはり、『南疆逸史』にも、弘光元年（順治二年）二月二十三日「慈烺」が崇王に封じられたという。

〔弘光元年（順治二年）二月〕丙子（二十三日）……慈烺を封じて崇王と爲し、福州府に駐するを命ず（『南疆逸史』卷一・紀略第一・安宗・「弘光元年（順治二年）二月丙子（二十三日）」条）。

このことについて、徐鼎<sup>⑦</sup>は、『小腆紀年附考』（咸豐十一年〔一八六一〕成）の「〔弘光元年（順治二年）二月丙子（二十三日）〕、明封慈烺爲崇王」条で、つぎのようなことを述べる。

攷えるに曰く、李自成の汝寧<sup>⑧</sup>を陥すや、崇王由櫛を執えて州縣を降すを諭せしむ。〔崇王〕由櫛 従わず。

世子の慈輝と並びに皆な遇害（殺害される）す。封を嗣ぐ者は何人なるかを知らず。〔『明史』〕列傳・

世表 考う可き無し。而して弘光の南奔するや、舊史は皆な「福・周・潞・崇の四王」と云う（『小腆紀年附考』卷第九・「〔弘光元年（順治二年）二月丙子（二十三日）〕、明封慈烺爲崇王」条）。

李自成が汝寧を落とすと、崇王由櫛を執えて、州縣に降れという論を出させようとした。崇王由櫛は、従

- ②馮夢龍（字は猶龍・耳猶・子猶，号は翔甫・墨憨齋・浪墨主人など。江蘇吳縣の人。萬曆二年（一五七四）～順治三年（一六四六）？。明・崇禎三年の歳貢生）の『甲申紀事』巻六所収の「淮城日記」（「〔崇禎十七年〕三月初九日」条）に「此の時に至り，福・周・潞・恒（年号の「崇禎」の忌避か）の四藩難を避け，俱に湖嘴に〔舟を〕泊<sup>とめ</sup>る」とある。『江南通志』巻二十六・輿地志・關津二によれば，「西湖嘴市は，山陽縣の運河の東岸なり。舟楫（船舶）の停埠にして，商賈 駢集（集まる）す」。
- ③路振飛は，崇禎十六年八月癸亥（二日）に「僉都御史・總督漕運・巡撫鳳陽」に擢せられる（『國榷』巻九十九・「思宗崇禎十六年八月癸亥（二日）」条・五九八六頁による）。そして，崇禎十七年（一六四四年）六月十四日に解任（『明季南略』（卷之一・「路振飛王變鎮撫淮安」条の「起田仰代公撫淮」の批に「批云，六月十四庚午，〔路〕振飛與田仰交代，即日遂行，士民挽舟悲慟」とあるによる））されている。崇禎十六年（一六四三年）八月二日から崇禎十七年（一六四四年）六月十四日まで鳳陽巡撫であった。
- ④馮夢龍の『甲申紀事』巻六所収の「淮城日記」（「〔崇禎十七年〕四月朔」条）に「是の日，周藩〔淮安府山陽縣の〕湖嘴の趙家に薨ず」とあり，日付が異なっている。

崇禎十七年三月六日，福・周・潞・崇の四藩の避難船八十艘あまりが，〔山陽縣の運河の東岸に〕やってきた。三月八日に鳳陽巡撫の路振飛（字は見白，号は皓月・三樹齋・白玉齋。直隸曲周の人。天啓五年乙丑科（一六二五）三甲二十九名の進士）と撫寧侯の朱國弼とが拝謁して避難してきた理由を尋ねた。船は小さくてたいへん暗かった。この時，周王はすでに病んでおられた。福王は「孤（福王由崧）は，河南が混乱してからは，母とともに懷慶に避難していた。この二月十六日に變亂の知らせを聞いて，懷慶城の四つの城門は大きく開かれた。〔福王由崧は〕

---

わなかったで、子供の慈輝などと殺害された。ここで、崇王を承襲したのがどういう人物か分からない。『明史』の諸王傳や諸王世表には記載されていないので、考えることができない。しかし、福王弘光帝が南下した時の記録には，「福・周・潞・崇の四王」といっている，という。

南明政権下で，崇王に封ぜられたのは，どのような人物が分からないというのである。ところが，『小腆紀年附考』を書き上げた後に書かれた『小腆紀傳』で徐鼎は，つぎのようにいう。

崇王慈燾，崇王由櫓の次子，英宗八世の孫なり。崇禎壬午（崇禎十五年），闖賊 汝寧を陷し，〔崇王〕由櫓及び世子慈輝・妃嬪を掠（捕虜とする）し以て行く。甲申（崇禎十七年）春，慈燾 諸王と偕に南奔す。命じて〔浙江〕溫州に居らしむ。乙酉（弘光元年）二月，〔崇王を〕襲封さし，命じて〔福建〕福州に居らしむ。終事は詳かなる可からず（『小腆紀傳』巻第九・列傳第二・宗藩・「崇王慈燾」条）。

崇王慈燾は，崇王由櫓の次子で，英宗八世の孫にあたる。崇禎十五年に，闖賊が汝寧を陷し，崇王由櫓や世子慈輝や妃嬪などを捕虜として拉致していった。崇禎十七年）春，慈燾は他の王族とともに南下した。南明政権は，浙江溫州に滞在させた。弘光元年二月，崇王を襲封させ，福建福州に滞在させた。その終わりは，詳らかにできない，という。

これは、文秉（字は蓀符，号は竺陽山人。江蘇長洲の人。萬曆三十七年（一六〇九）～康熙八年（一六六九）二月。六十一歳で卒す。國子官生）の『甲乙事案』に，

崇王の二子に臺・處の二府に僑處するを命ず（『甲乙事案』巻上・「崇禎十七年六月」条）。とあるのと，

崇王世子慈燾 溫州に寓居す（『甲乙事案』巻上・「崇禎十七年十二月」条）。と記されていることによったのかもしれない。



平服で母とともに出て東門に行ったが、門は閉じられていた。しばらくして出たが、たちまち母の居所を見失ってしまった。いま、ここにやってきてそのことで涙している」という。この日、福・周・潞・崇の四藩はふたたび集合した。山陽縣の清江浦の人々はストライキを起こした。路振飛は、千金を供出して、町はようやく落ち着いた。十一日、周王が船着き場で亡くなり、民間人の趙啓申の家に柩を置いた。十八日、福王は、山陽縣湖漿の生員の杜光紹の家に身を寄せる。二十七日、藩王たちは鎮撫にそれぞれ馬二匹を贈った。四月五日、潞王は南下した。四月十九日、周王の柩も南下した。四月二十二日、福王由崧が出発した。

崇禎十七年三月六日、福王由崧は、周王・潞王・崇王らとともに八十艘の避難舟で淮安府山陽縣の運河の東岸の湖嘴にたどり着く。十八日に淮安府山陽縣湖漿の生員の杜光紹に邸宅に身を寄せた。潞王は四月五日に南下し、福王由崧は四月二十二日に出発する。

すでに検討した陳燠の疏に、

青浦知縣の孟津〔出身の〕陳燠 奏すらく、「……今年三月二十五日、臣（陳燠）淮安に〔福王弘光帝に〕謁す……（『國權』卷一百二・「思宗崇禎十七年七月甲午（九日）」条・六一二九頁）。

とあるので、福王由崧は三月二十五日には淮安にいたようである。

ただし、『國權』では、四月丁丑（二十日）に淮安より南の高郵に至ったとある。

時に王（福王由崧）の舟 高郵に抵る（『國權』卷一百一・「思宗崇禎十七年四月丁丑（二十日）」条・六〇七七頁）。

『明季南略』所引の「甲乙史」には、つぎのようにいう。

『甲乙史』に云う、三月、福・周・潞・崇の四王 各々藩を棄てて南奔す。此れ初四日なり。十一日、周王 淮安〔府山陽縣〕湖嘴<sup>し</sup>の舟中に薨ず。十八日、福王〔淮安府山陽縣〕湖嘴<sup>し</sup>の杜光紹の園に寓（身を寄せる）す。廿一日、潞・周の諸藩の行舟（航行してきた舟）皆な湖嘴<sup>し</sup>に泊<sup>とめ</sup>る。二十九日丁巳、淮上 始めて京師の陷いるを伝えらる。衆 猶お疑信相い半ばするがごとし。南京も亦た始めて戒嚴す（『明季南略』卷之一・甲申四月五月事・「赧皇帝」条）。

崇禎十七年三月に福・周・潞・崇の四王は、それぞれ封建された領地をすてて南下した。これは、崇禎十七年三月四日である。三月十一日に、周王は淮安縣湖嘴<sup>し</sup>の停泊中の舟の中で亡くなった。三月十八日に福王由崧は山陽縣湖嘴<sup>し</sup>の杜光紹の家に身を寄せた。二十一日には潞王と周王の諸藩は、航行してきた舟を山陽縣湖嘴<sup>し</sup>に停泊した。二十九日に淮安一帯に初めて北京が陥落したと伝わった。人々はまだ真偽相い半ばするようであった。南京でも嚴戒態勢が布かれた、という。

（つづく）